HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ハイエク景氣理論と生産構造
Author(s)	林, 昭男
Citation	北海道大學　經濟學研究, 7, 55-70
Issue Date	1954
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31012
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_P55-70.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ハイエク景氣理論と生産構造

林　昭男

一、序　論
二、生産構造圖形について（以上本號）
三、好況と生産構造（以下次號）
四、不況と生産構造
五、結　論

一、序　論

ハイエク景氣理論の特色は從來の景氣理論が、その變動原因を或いは實物要因に求め、或いは貨幣的要因に求めて一方的要因から景氣變動過程を把握しようとしたのに對し、この二つの要因の結合から景氣變動を說明することにある。併し、この二つの要因が單に平面的に結合するのではなく貨幣的要因の作用を重視し、實物的要因が實物的要因に積極的に作用することによつて景氣變動現象が發生するものとした。かように、ハイエクは貨幣的要因に優位性を

認めて貨幣理論と財貨理論とを結合し、それによつて景氣變動を把握せんとする。ハイエク景氣理論が貨幣的景氣理論と呼ばれるのもこの貨幣的要因の重視からに外ならない。

貨幣的要因と實物的要因との結合がハイエク景氣理論の特色であるならば、この二つの要因とこの二つの要因が如何に結びつくかが示されなければならない。貨幣的要因は銀行組織に基づく流通手段の增加であり、他方、實物的要因はハイエクが資本主義的生産の特色を迂回生産に求めて構成した資本家的生産構造圖形である。

さて次に、この二つの要因の結合について見よう。自然利子率が騰貴し、その結果自然利子率は貨幣利子率から乖離する。この兩利子率の乖離は、現在の信用機構の下において、貨幣利子率を引上げることなく信用創造により流通貨幣量を增加せしむることが可能である。この貨幣量の增加が生産構造に作用し、從つて、生産構造は變化する。

かように、ハイエクは景氣變動を生産構造の變動として把握した。好況は生産構造の延長であり、不況は生産構造の短縮である。從つて、景氣變動が生産構造の變動として現象するかどうかはハイエク景氣理論の根本問題である。ここにおいて、私はハイエク景氣理論に向けられた諸批判に基づいてこの問題を取扱おうと思う。先ずハイエクの描いた資本家的生産構造圖形を研討し、而かる後に景氣變動の過程である生産構造の變動を述べることにする。

尙本號は資本家的生産構造圖形を說明し、若干の問題を指摘するに止める。景氣變動過程については次號に廻すことにする。

二、生産構造圖形について

(一)

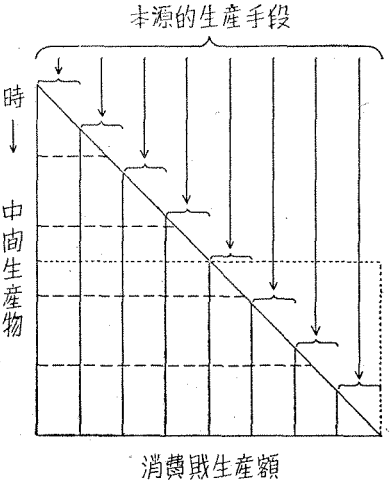
ハイエクは、現代の資本主義的生産組織の本質的な特色を迂回生産に求めている。迂回生産とは使用可能なる本源的生産手段の大部分が直接的な必要の滿足のために使用されるのでなくて、かなり遠き將來のための消費財を準備するために用いられることである。この迂回生産方法が用いられるのは、生産過程の延長によつて、我々が一定量の本源的生産手段からより多量の消費財を獲得することが出來るからである。(1)

さて、資本主義的生産組織の本質を迂回生産に求めたハイエクは、資本主義的生産の問題が迂回生産構造の變動にあると見る。かくして、この迂回生産構造の意味する問題を明瞭にするために、迂回生産構造を圖形によつて表現し、この圖形からその問題を指摘しようとしている。從つて、ハイエク景氣理論においては、この生産構造圖形は理論的な基礎であり、彼の景氣理論を研究していく前に、生産構造圖形を研討することが必要である。

次にハイエク生産構造圖形の構成について見よう。

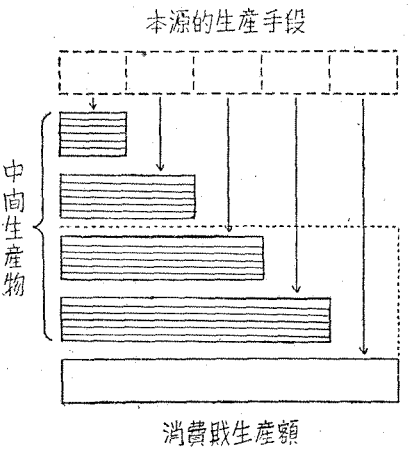
ハイエクは迂回生産構造を表現するために直角三角形を用い、或る時點における消費財の生産に必要なる本源的生産手段が連續的に使用される圖形を描いた。この圖形（第一圖）にお

第一圖



いて、直角三角形の三邊の意味するものを示すならば、底邊は消費財の經常産出額の價値を表し、底邊への垂直邊は生産の著手から完成消費財の産出までに經過する時間を示し、斜邊は消費財の完成のために必要とされる本源的生産手段が全生産期間にわたつて投入されることを示している。それ故に、その直角三角形の面積は消費財に完成される以前に本源的生産手段の數單位が通過する連續的段階の全体又は消費財を連續的に確保するために、或る時點において存在しなければならない中間生産物の全量を示すことになる。

第二圖



さて、この直角三角形により現わされた生産構造圖形において表現するそれぞれの意味が明らかになつたのであるが、この生産構造圖形の形を規定するものは、ハイエクによれば一時點において消費財の一定量を連續的に確保するために必要なる中間生産物の量とその消費財生産額との比率である。そして、その比率は迂回生産過程の長さが長くなるにつれて、消費財生産額に對してますます大きくなるのである。從つて、生産構造は比率の大となるにつれてハイエクのいう所謂資本家的に有利なる生産構造に推移することになる。(2)

かように、ハイエクは、先ず完全に連續的な生産過程を圖形に描いたのである。併し、彼はこの生産構造圖形が理論的目的のためには少し扱いにくく、又かような諸前提は多分十分には現實的でないとの理由の下に、單純化された生産構造圖形に修正する。この單純化された生産構造圖形、即ち第二圖においては、生産の著手から最終の消費財までの過程を數段階に分割し、本源的生産手段が連續的ではなく一定期間を經て投下されて行き、最後に消費財が生産

される。

さて、この單純化された生産構造圖形において、最終段階は消費財の生産額を現わし、本源的生産手段と最終段階との間に介在する各段階は相應する生産段階の生産物を現わしている。各生産段階では、その前の段階の中間生産物と本源的生産手段とによつてその段階の中間生産物を生産し、漸次一段階づつ高次の段階から低次の段階へと移つていく。從つて、財貨の運動を見るならば絶えず高次の段階から低次の段階に移動していく。それに對し、貨幣は財貨と交換に手渡されるのであるから、貨幣の運動は逆の方向、即ち低次の段階から高次の段階へと移動して行くのである。(3)

(1) Hayek: Prices and Production p. 37-38.
(2) Hayek: ibid., p. 38-42.
(3) Hayek: ibid., p. 42-46.

(二)

以上において、ハイエクの資本家的生産構造圖形の構成について說明してきたのであるが、ここにおいては資本家的生産構造圖形に關する問題點を述べようと思う。

先ず第一に、ハイエクは「物價と生産」における生産構造圖形において、耐久財を除外した。これについてハイエクは資本構造の實物的局面に關する限り、「三角形が進行中の財のストックのみならず、一時點に存する耐久設備をも表わすと取らなければならない」(1)ことを認める。併しながら、耐久財のなすサービスを彼の連續的生産構造圖形の中に入れることは困難であるという。即ち、「貨幣と交換に段階から段階へと中間生産物の連續的移轉を表わす圖形

的表現を使用しようとするならば、耐久財の中に表現される個々のサービスが實際消費されるであろう時までより近くの段階に接近するように規則的に手を變えると假定することは不可能であるから、耐久財を進行中の財貨と同樣の方法で取扱うことは困難である」[2]と。

さてこれによつて見る限り、ハイエクが資本家的生産構造圖形から耐久財を除外したことは、ただ圖形構成上から來ているように見えるであろう。併し。「物價と生産」の「第二版えの序文」を見るならば、必ずしも圖形構成上の問題とのみ受取れない。「第二版えの序文」において、ハイエクは耐久財除外の問題について次のように述べている。「このことはあまり重大なる缺點であつたとは思われない。特に、流動資本の演ずる役割が無視されており、從つて、固定資本の役割に比較して流動資本をより强調しようとする考えを私が持つている時にはそうである」[3]

要するに、ハイエクは生産構造の中で演ずる流動資本の役割が無視されていることを認め、それに對し流動資本の役割を强調しようとした。ハイエクの述べる如く、流動資本の役割が無視されている時に、その役割を强調するために固定資本を除外して考えることは一つの方法であるかも知れない。併し、現實の生産構造が固定資本と流動資本とから構成されている限り、生産構造を考える場合に固定資本のみを考えることが生産構造を正しく理解することが出來ないと同樣に、流動資本のみをもつて考えることも又生産構造を正しく理解することが出來ないのでなかろうか。固定資本及び流動資本が生産構造に占める役割に應じてそれぞれ評價されて初めて生産構造を正しく把握できるのでなかろうか。

ハイエクはその後の論文「利潤、利子及び投資」において　生産構造圖形から耐久財を除外したことを一つの缺點として認め耐久財を考慮に入れて資本家的生産構造圖形を修正した。これについては後節に於て述べるであろう。

第二に、資本家的生産構造圖形における段階の意味について述べよう。ハイエクは各生産段階によつて本源的生産

手段の數單位が消費財に完成されるまでに經過する連續的段階を示している。そして各段階は中間生産物を表わし、それぞれの中間生産物が消費からの時間的經過によつて配列されている。

さて、資本家的生産構造圖形において、「各生産段階の大きさは貨幣價値額であり物理的生産量[4]」で表示しなかつた。この生産段階の貨幣額での表示からコールの次のような解釋が生じて來たようである。即ち、「ハイエク博士の理論を正しく理解するならば、彼の三角形が直接には財貨ではなく貨幣を表わしている。何となれば、彼はある時には恰も財貨の流れを表示している如く述べているけれども、併しながら直接に表示しているのは財貨が賣られる貨幣であり、財貨そのものでない。[5]」かようにコールは生産段階を直接的には財貨的な表現でないものとし、生産段階をただの貨幣額の配列とし「貨幣段階[6]」として解している。併しながら、このコールの生産段階の理解は少し極端でなかろうか。ハイエクは各生産段階を貨幣額で表現したけれども、それは便宜上であり生産構造圖形で表わさんとしたのは先ず中間生産物の流れであつたはずである。

次に、生産段階の意味についてのホートレイの批判を見よう。ホートレイはハイエクが「段階」という言葉を使用することが誤りに導くという。「織布工程が紡績工程から區別され、仕上工程が織布工程から區別され、そして仕立工程が仕上工程から區別されるように、それは一つの明瞭な過程である。併し、ハイエク教授がそれを規定する時には、『段階』の唯一の明白なる特色は完成される以前に經過すると豫定された期間である。あらゆる財貨は種々の異なつた段階に屬し、あらゆる段階は種々の異つた財貨を含んでいる。そしてどの財貨がどの段階に屬するかということは理論的にさえ全く不可能である[7]」と。ホートレイの指摘する如く、通常生産段階という場合にその段階は技術的な意味における同一の生産物を生産する段階をいうに對し、ハイエクの生産段階はかような段階でなく消費からの時間的經過によつてそれぞれの中間生産物を配列した段階である。從つて同一の中間生産物であつて種々の段階に屬し

生産技術の觀點から見た生産段階とは異なつた獨特な段階を意味しているようである。

第三には生産期間の問題である。ハイエクによれば生産が「資本家的」になるにつれて本源的生産手段の使用から消費財の完成までの平均時間が增加する。又同時に、生産構造圖形においてはその生産段階數の增加を意味するのである。このようにハイエクにおいては生産期間の長期化と生産段階數の增加とは同一のことを意味している。

さて、この生産期間の長期化と段階數の增加とを同一視することに對し、コールは如何なる手段によるにせよ、「より資本家的」生産方法は全生産過程の取る時間を必ず長期化することには同意しない。むしろ實際にはその時間を短縮化する可能性を指摘している。その可能性の理由として、コールは次の事實を指摘している。「新しい資本が輸送方法の改善のために、一つの仕事がより早く遂行するために、又以前には個々の企業で行われていた連續的過程を一緒にするために用いられ、かくして低い資本家的生産方法において含まれていた時間」[8]を除去する。このように『より資本家的』生産方法の使用は生産期間の短縮化されることであり、現代の資本家的機構の諸條件の下においてはこの期間の短縮をなそうとしているものであると考えている。……ハイエク博士がこの垂直線は時間を表わすというけれども、これは實際には彼の意味せんとするものでなく、彼が時間の概念を導入したことは殘念なことである」[9]

コールは投下資本の增加による「より資本家的」生産方法に推移した場合には、必ずしも生産の著手から消費財の完成まで經過する時間は長くなるのでなく、むしろ投下資本はこの時間を短縮化する方向に使用されることを指摘している。より多くの資本を使用ずる生産方法は「より迂回的」であり「より資本家的」な生産方法である。それ故に、若し生産の迂回的な程度を段階で示すならば、「より資本家的」生産方法への推移は資本家的生産構造圖形においては當然段階數の增加として現われるのであろう。併し生産期間の長さを長期化するとは必ずしもいわれないのでなかろうか。從つて、ハイエクが「本源的生産手段の使用から消費財の完成るでの平均時間」と「生産段階數」とを

同一のこととして見ることは正しくない。

さらにハイエクの生産構造の長期化が生産期間の長さでなくその生産段階數の增加を意味するものであるとしても、生産構造の長期化が必ず生産段階數の增加を意味するであろうか。この問題に關してもコールの考えは否定的である。コールは「より資本家的」生産方法、即ちより多くの資本を使用する生産方法が必ず「より迂回的」であるというハイエクの見解を受入れないで、反對にしばしば「より迂回的」生産方法は段階の挿入よりもむしろ段階の除去を意味するかも知れないという。勿論、彼は「より資本家的」生産方法が必ずどちらかであるというのではない。屢々段階數は「より資本家的」生産方法の採用によつて變化しないのであり、從つて、生産が「より資本家的」型態を取るにつれて、增加しなければならぬ必要はないと述べている。(10)

コールは資本家的生産方法を測定する尺度として生産段階數の增減をもつて見ることは出來ないという。ハイエクの意味する生産段階を中間生産物が貨幣と交換に手を替える段階と取るならば、「より資本家的」生産方法の採用はしばしば連續せる段階において個々の企業によつてなされていた仕事が企業の結合の結果として一企業によつてなされる場合があり得るから生産段階數は減少するであろう。併し生産段階を技術的意味に解するならば、生産段階數は「より資本家的」生産方法と共に增加するか、或いは同一であつて減少することはないのでなかろうか。もつともハイエクが生産段階を技術的意味に解したかどうかは疑問であろう。

第四には資本家的生産構造と技術との關連についての問題である。「物價と生産」においては、ハイエクは「技術的知識が同一である」(11)という前提の下で資本家的生産構造の變動を考察した。先ずこの前提に對するコール、及びホートレイの見解を述べよう。

この「技術的知識が同一である」という前提について、コールは「技術的變化の影響を除外した狀態に基づいてい

る」[12]と理解して次のようにいう。「技術的變化とは何か。それは(a)單なる新發明か、或いは(b)新しい發明による又は既になされた發明の使用の擴大による變化を含んだ産業の技術的構造の變化であるのか。私はハイエク博士が(a)を意味していたに違いないと思う。若しハイエク博士が(b)を意味したとするならば、私は全く技術的變化を含まない如何なる方法にても『より資本家的』になる産業組織を考えることは出來ない[13]」と。又、ホートレイも「ハイエク教授の議論はすべて『技術的知識』が同一であり、そして技術的進歩による生産構造の變動はないという條件に從つている[14]」という。

コールは技術的變化なくして生産構造の變動を考えることは出來ないといい、ホートレイは技術的進歩がない場合における生産構造の長期化を考えている。さてハイエクは技術と生産構造との關係について如何に考えたのであろうか。

ハイエクは「物價と生産」においては單に技術的知識は同一である」といつているにすぎない。從つて、それが同一の技術の下において生産構造の變動を考察したのか、或いは技術的知識は變化しないが現在採用している技術よりも「資本家的」な生産技術が既に知られており、その既知の技術の採用によつて長期的生産構造に推移するのかは明瞭でない。併し彼の著書「資本の純粹理論」においてこの關係を明らかにしているから、それによつてハイエクの論旨を明らかにしよう。

「前述の諸考察（生産過程の延長についての考察……林）はかかる意味（發明又は發見……林）における技術の進歩と何ら關係をもつていないのである。反對にそれらの諸考察は知識の不變なる條件の下における變化に關聯しているのである。想定されることはただ何れかの時點に於て使用し得る諸資源の利用に關し既知の可能なる諸方法があり、而してそれは現實に採用されているものよりも大なる收益をもたらしはするが、後の時期までこの收益をもたらさな

いという理由を以て現實に用いられないということである」[15]。

これによつて見るならば、ハイエクが發明及び發見に基づく生産技術の進歩を除外するために「技術的知識が同一である」という前提を置き、「物價と生産」における生産構造の變動を取扱つたと見るべきであろう。ハイエクによるならば、發明及び發見がなくても現在の技術的知識の下で收入をもたらすまでの期間の大小によつて種々の生産方法が存在し、その期間の大小によりそれぞれ異つた生産方法が採用されるのである。從つて、長期的生産構造への推移は同一なる生産方法によつてなされるのでなく、異つた「より資本家的」生産方法によつてなされるのである。

このように考える限り、「技術的知識は同一である」という前提は知識が不變であることを意味し、長期的生産方法に採用される技術が不變であることを意味するのではない。上述の如く、コールは技術的變化なくして生産構造の變動を考えることの出來ないことを述べ、技術的變化を二つに分けた。一つは(a)單なる發明、發見であり、他は(b)新しい發明によるか又はすでになされた發明の使用の擴大による變化を含んだ產業の技術的構造の變化である。かくしてコールは、ハイエクの前提する意味を(a)であると解したのであつた。從つて、生産構造の長期化は(b)の意味における技術的變化によつてなされるのである。さて、「資本の純粹理論」におけるハイエクの見解を見るならば、コールが生産構造の長期化をすでになされた發明の使用の擴大による技術的變化によつてなされると解釋したことは妥當であつたと見るべきである。

最後に、ハイエク生産構造變動に關してのヒルの見解について述べよう。ヒルはベェムが平均生産期間を二つの意味に用いているという。一つは「現在の消費財を生産するために本源的生産手段が働いた日數を跡づけることから得られる時間」[16]であり、他は「將來何時現在の資源ストックの生産物が消費出來る形で現われるかを考えることから得られる時間」[17]である。ヒルは前者を經過期間 (the cmpleted period) と呼び、後者は豫想期間 (the anticipated period)

という。

さて、生産期間を二つの意味に解して、ヒルはこの二つの生産期間の關聯について述べる。ヒルによれば、「均衡狀態より出發し、始まつたすべての新しい過程が完成すると假定するならば、豫想期間の長期化は暫くしてから全く等しい經過期間の長期化によつて伴なわれ、……前者の期間の短縮は最終には後者の相應の短縮を伴うであろう」[18]。併し、「若し均衡的前提を捨てるならば、二つの平均期間は必ずしも相應しないであろう。不況の初めにおいて、豫想期間は急速に縮少するに對し、經過期間は第一には好況の間に始まつた迂回過程の完成の結果として、第二には置換の中止又は減少による固定資本の平均年數の增加の結果として、長期化されるかも知れない。又不況の谷において、豫想期間は普通、現存の過程を維持するために必要なる水準以下にあり、そしてこれらの過程に必要なる資本は消耗している。この諸事情の下では、經過期間の長期化を始めることなく、豫想期間は資本が置換されるまで一時的に均衡水準以上であり得ることが出來る」[19]。

景氣變動の過程において、經過期間と豫想期間は必ずしも相應するものでないと述べて、ヒルはハイエクの生産期間が豫想期間であるという。即ち、『物價と生産』とその他の場所において、ハイエクは信用の膨脹により平均生産期間が好況の期間にわたつてそれが永久に維持されることの出來る以上に長期化され、そして恐慌は必然的に續く『より短期的』期間への推移を表すということを簡單に主張している。その變動が景氣變動の特色である時間要素は豫想期間であり經過期間でないことは上述の發展させた議論から明らかである」[20]と。

さて、「ハイエクの主張と事實との調和を認めようとしたヒルの主張」[21]に對し、高田保馬博士は次のように反對なされる。「新しく投下せらるる部分についてのみ考うることは、社會の全資本準備について考えようとするハイエクの意見ではないであろう。また、究極に於て成立する全資本と全勞働と生産力との間の均衡を考察する所のベェムの

見解との、一致を高調するハイエクの意見ではないであろう」[22]と。高田保馬博士の指摘される如く、ハイエクは生産構造を考える場合に「社會の資本準備（われわれの圖においては中間生産物の全量）」[23]を問題としているのであり、ヒルの如く生産構造の變動を豫想期間に關するものであり、新しく投下される資本に關するものであると考えることはハイエクの眞意ではないのでなかろうか。

(1) Hayek: Prices and Production p. 40. footnote.
(2) Hayek: ibid. p. 41.
(3) Hayek: ibid. XII.
(4) Hayek: ibid. p. 42.
(5) Cole, G.D.H: Studies in World Economics, VIII, Dr. Hayek's Triangle p. 125.
(6) Cole: ibid. p. 126.
(7) Hawtrey: Capital and employment p. 226.
(8) Cole: ibid. p. 125.
(9) Cole: ibid. p. 125.
(10) Cole: ibid. p. 126.
(11) Hayek: ibid. p. 35.
(12) Cole: ibid. p. 126.
(13) Cole: ibid. p. 126.
(14) Hawtrey: ibid. p. 242.
(15) Hayek: The Pure Theory of Capital p. 73.
(16) Martin Hill: The Period of Production and Industrial Fluctuation E. J. 1933. vol. 63. p. 603.
(17) Hill: ibid. p. 603.
(18) Hill: ibid. p. 604.

(19) Hill: ibid. p. 604.
(20) Hill: ibid. p. 604.
(21) 高田保馬著　利子論研究　四七九ページ。
(22) 高田保馬著　前掲書　四七九ページ。
(23) Hayek: Prices and Production p. 48.

(三)

ハイエクは「物價と生産」における資本家的生産構造圖形が「耐久財の最も重要なる資本型態である世界には適用されないし、種々の生産段階の依存性が單線的な印象をあたえる[1]」ことを認め、「利潤、利子及び投資」において資本的生産構造圖形の修正をした。

さて、この修正された資本家的生産構造圖形においてもやはり段階の概念を維持し、「物價と生産」における資本家的生産構造圖形の「單線的配置をもう少し精巧なる圖形に變え[2]」ようとしている。以下においてハイエクの描いた資本家的生産構造圖形を説明するならば、先ず消費財産業を段階Ⅰとし、諸生産財を直接に消費財産業に供給する種々なる産業をそれらの供給する生産財の資本家的性質の大小によつて段階Ⅱ、Ⅲ、Ⅳとして分類する。段階Ⅱは資本家的方法の最も低い型の生産財、即ち原料や單純なる道具を供給し、段階Ⅲは少し耐久性のある設備や自動性の少ない機械を段階Ⅰ及びⅡに供給し、又段階Ⅳはより資本家的方法の型の機械を供給する。かように生産段階が上るにつれてますます高度の資本家的な機械を供給するのである[3]。

この圖形においてハイエクは現實の生産構造を完全には表現していないことは認めるが、「少なくともある程度までは現實の産業組織の本質的な特色を表わしている[4]」と考える。何となれば、「ある産業はかなり直接的に又は支配

的に消費財産業による資本財需要に依存している。それに反し、他の産業はほとんど他の資本財産業に役立つように現われ、そしてなお他の産業は『より資本家的』、『より勞働節約的』生産方法へと推移において、すべての他の産業を援助するのに適している」[5]からである。

この修正された資本家的生産構造圖形は「物價と生産」における生産構造圖形よりも現實の生産構造に近づいたことは認めなければならない。第一に耐久財を重視して生産構造圖形の中に取入れたことである。資本主義的生産の發展につれて耐久財の生産構造に占める重要性はますます增大するのであるから生産構造圖形の中に耐久財を取入れたことは一歩現實の生産構造に近づいたことになろう。第二には段階の規定とその諸段階の關連である。「物價と生産」においては段階は中間生産物を示し、それが消費からの時間的距離によつて配列されていた。而るに、「利潤、利子及び投資」における資本家的生産構造圖形においては、各段階は産業部門を表し、各産業部門が生産する生産物の「資本家的」性質の大小により消費財生産部門から上方に配列されている。生産段階が中間生産物でなく産業部門を表すことにより、單に生産活動の結果として出來た生産物のみでなくその生産に使用された諸生産手段をも各段階に含まれることになり、生産段階はより現實に近づいた。又各段階は次の段階にのみ生産物を供給するのでなく、その段階より低次の段階に直接に中間生産物を給することにより、換言すれば複線的表示により、各段階、即ち産業部門が密接に關連づけられることになる。併し各産業部門は複線的關連で十分なのではない。この關連を正しく表現するためには直線的表現でなく、ハイエクも認める如く[6]循環的表示によらなければならないであろう[7]。

以上によつて、ハイエク景氣理論の實物的側面である資本家的生産構造圖形について考察してきた。次章以下において、この資本家的生産構造圖形が貨幣的要因の影響によつてひきおこされる變動過程の考察に入ることにする。

(1) Hayek: Profit, Interest and Investment p. 21.

(2) Hayek : ibid. p. 21.
(3) Hayek : ibid. p. 21.
(4) Hayek : ibid. p. 23.
(5) Hayek : ibid. p. 23.
(6) Hayek : ibid. p. 22.
(7) Hawtrey : Capital and Employment. p. 253.

(未完)